

## 審査の結果の要旨

氏名 李季樺

本論文は、台湾社会の特質の歴史的な形成過程を探究するという問題関心に基づき、19世紀台湾における日常的な秩序・規範の形成と変容を長期的な視野に立って分析したものである。19世紀台湾の社会文化史を論ずるに当たっては、従来、清朝や日本の統治のもとでの「文明化」「近代化」の進展に着目する論調と、多様なエスニック集団によって構成される台湾社会の文化的多元性に着目する論調とが二つの流れをなしてきたが、本論文はその双方の視点を結び付けつつ、国家権力によって推進される日常的風俗の規範化の動きが住民に受容され内面化されていった複雑な過程を、実証的に跡付けようとしている。地方志・随筆などの刊本史料が網羅的に集められ検討されているほか、著者自身がフィールドワークを通じて収集した契約文書やインタビューも、史料の一部として生かされている。

第一章では、清朝に帰順した先住民集団の一つである竹塹社を取り上げ、清朝が先住民社会に導入しようとした漢式姓名、宗族制度、祖先祭祀など家族に関わる中華的文化規範がどのような変容を被りつつ受容されていったかを論じている。第二章では、19世紀台湾において、「敬惜字紙」（字の書かれた紙を尊重する）の慣習がどのような社会的背景のもとで大陸にもまさる広範な普及を見せたのかを検討する。第三章・第四章はそれぞれ19世紀前半と後半における清朝の官僚知識人の台湾風俗観を分析し、台湾漢人の風俗の特色として強調される奢侈の問題や、道教的勸善思想の影響の拡大の趨勢を検討している。第五章では、19世紀末に台湾が日本に割譲されて以降、明治期日本の官僚・知識人によって行なわれた台湾風俗の考察を取り上げ、特にその「迷信」観を中心として、第三章・四章で扱われた清朝知識人の台湾風俗観察との異同を論ずる。

以上の克明な考察により、19世紀台湾の日常的規範の変容の諸側面がリアリティをもって描き出された。特に、竹塹社の人々が中華的宗族規範を受容するに際して自らの社会組織や祭祀のあり方と融合させつつ生活文化を変容させていったこと（第一章）や、「敬惜字紙」慣行が儒教的規範や道教的信仰の普及とは必ずしも結びつかず日常実践における禁忌として台湾社会に深く根をおろしたこと（第二章）、台湾社会における中華文明規範の普及は日本統治下の1910年代にそのピークに達したこと（第一・二章）などは、規範の受容者側の主体性に注目した新しい事実発見であり、研究史上重要な指摘といえることができる。

問題提起のスケールの大きさと鋭さに比して、本文の実証的分析がその問題提起に全面的に答えるだけの広がりや欠いていること、また、第一・二章の個別トピックの研究と第三章以下の風俗論・迷信論の考察とが十分に有機的に組み合わせられていないことなど、問題点も存在するが、全体として、19世紀台湾の日常的規範の変容について新味ある視角から丁寧な考察を行ない、従来見逃されてきた諸側面を明らかにした意義は大きい。

以上より、本委員会は、本論文を博士（文学）の学位を授与するにふさわしい業績と認定するものである。